

現代社会の急速な世俗化のさなかでの信仰の重要性

The Importance of Faith in the Midst of Rapid Secularization of the Contemporary Society

Reginald ALVA SVD

概 要

現代社会において世俗化が急速に進んでいる。それ故、宗教に基づいた価値観が希薄になっている。特に西欧諸国ではキリスト教信者の数が減りつつある。このような状況の下でキリスト教信者の信仰が翻弄されている。一部の人は科学と技術の発展が重要であると強調し、信仰をないがしろにしている。しかし、このような困難な時にこそ信仰が重要である。なぜなら、科学は万能ではないし、人間が抱えているすべての問題を解決する力も持っていないからである。第二バチカン公会議と教皇の諸文章では、現代社会の世俗化が進行している時こそキリスト教の信仰が大切であり、また健全な社会を築くのに重要な役割を持っていると訴えている。本稿は教会の諸文章、特に教皇フランシスコの教えを取り上げながら信仰の重要性と、世俗化に立ち向かうための対策について考察する。

1. はじめに

ルネサンス期以降、理性を強調する哲学者が増えてきた。それ故ヨーロッパの伝統的な宗教であるキリスト教の権威が弱くなっていった。現在、ヨーロッパのみならず世界中で世俗化が進んでいる。それに伴い、多くの人々が伝統的な宗教にあまり関心を持たなくなっている。現代社会人の多くは科学、医療や技術の発展がすべてであると考えている。信仰は個人的なことであり公的なものではないとされている。しかし、科学、医療や技術のみで人間のすべての内的なニーズを満たすことはとてもできない。第二バチカン公会議以降、教会は現代社会の急速な世俗化のさなかで信仰の重要性を強調している。本稿は世俗主義の様々な解釈、またそれに立ち向かう対策を考察する。本稿ではこの研究のために、主に第二バチカン公会議、教会の諸文章と神学者たちの意見を参考にする。

2. 世俗主義についての様々な解釈

世俗主義の解釈は様々である。世俗という言葉のラテン語の語源は *saeculum* であり、そのことばは世から離れることである¹⁾。テラー師の著書 *A Secular Age* (世俗時代) によると、世俗主義には主に三つの解釈がある²⁾。第一に政教分離である。第二に宗教的な行事と儀式の衰退である。第三に神の存在、宗教と信仰にチャレンジすることである。第一の解釈によると世俗主義は必ずしも宗教と信仰を抑圧すべきであるとは求めている。例えば、インド共和国では政教分離を適用しているが、国民の多数が何らかのかたちで宗教を信じている。アメリカ合衆国についても同じことが言える。第二の解釈の観点から考えると宗教的な行事、儀式と活動が時代と共に様々に変化を見せることは当然である。第一と第二の解釈によると世俗主義は宗教を直接的に否定してはいないが第三の解釈は宗教を軽視しており、経験による知識を得られないものは否定すべきであると強調している。この解釈こそが信仰をないがしろにし、伝統的な宗教を攻撃している。したがって、本稿では世俗主義の第三の解釈を取り上げることにする。

3. 世俗主義対信仰

19 世紀から欧米では世俗主義が強くなり、その影響は社会の隅々にまで及ぶようになった³⁾。特に第二バチカン公会議で教父たちが世俗主義について深く議論し、それに立ち向かうように「現代世界憲章：Gaudium et Spes 喜びと希望」を出した。まず、この文章で、教父たちはキリスト信者が世を否定するのではなく肯定的に接するよう促した。なぜなら、教会は「人類とその歴史とに現に深く連帯していると実感している」からである⁴⁾。また、「人間の世界は人類の歴史が展開されている舞台である」⁵⁾からである。

つまり、人間は誰もがこの世（地球）に属しているので、世を大事にしなければいけないということである。キリスト信者も同様である。キリスト信者はこの世の一員として、神の恵みによってこの世をより良いものにするよう努力せざるを得ないということである。公会議の教父たちも、次のようなことばでキリスト信者に対して世に関する責任を負うよう促している。「天上と地上との二つの国の市民であるキリスト信者が、福音の精神に導かれつつ地上の義務を心して忠実に果たすように勧告する」⁶⁾。キリスト信者にとって、世は完全なる悪ではなく神に創造された良いものである。コックス師の著書『世俗都市』もまた、世俗化すべてが悪ではないのでキリスト信者が世俗

1) Michael Dodd, "Secularism," in *The New Dictionary of Catholic Spirituality*, ed. Michael Downey (Collegeville: The Liturgical Press, 1993), 864.

2) Charles Taylor, *A Secular Age* (Cambridge: Belknap Press of Harvard University, 2007).

3) J. C. D. Clark, "Secularization and Modernization: The Failure of a Grand Narrative," *The Historical Journal* 55, no. 1 (2012): 161-194.

4) 「現代世界における教会に関する司牧憲章」, 1.

5) 同書, 2.

6) 同書, 43.

主義を避けるより、それを受け入れて宗教の改善につなげていくようにすれば良いと主張している⁷⁾。

罪がこの世に入り、神の本来の計画を乱したため、キリスト信者の戦いは「血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」(エペ6:12)。罪によってこの世が汚れてしまったにもかかわらず、神はこの世をお見捨てにならない。それは信仰の目から見ると、まさに神秘である。「この地上の国と天上の国との相互浸透は、信仰によって初めて理解できるものであり、神の子らの輝きが完全に啓示される時までは、罪によってかき乱される人類史の神秘であり続ける」⁸⁾。

教会は自分たちの使命はキリストご自身により与えられたものであると認識している⁹⁾。それ故、教会は啓示と福音に照らされて人類を導いている。「教会は、自分に預けられた神のことばを守り、そこから宗教と道徳の分野における諸原理をくみ取り、個々の問題についてつねに即答することはできないものの、啓示の光をすべての人の経験と照らし合わせて、人類が近年踏み入った行路を照らそうと望んでいる」¹⁰⁾。他方で、教会は世から様々なことを学ぶ可能性も認めている。教会は、自らがありとあらゆる分野において知識を持っているとは宣言していない。むしろ、教会は世から助けられることもあると認めている。「教会は福音を根づかせる準備にあたって、個人であれ人間社会であれ、その才能と活動によって、世からいろいろな方法で大いに助けられうると確信している」¹¹⁾。

一方、キリスト信者は、この世にいるすべての人々の善のために努力をする必要がある。彼らはキリストの掟「互いに愛し合いなさい」(ヨハネ13:34)を実行しなければならないということである。この世は罪に塗り固められているため、キリスト信者は自分たちをまゆのようにぴたりくるとでしめようと福音を広めることができない¹²⁾。キリストは、自身の使命について次のよう語られている。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」(ルカ4:18-19)。キリストはこの世にいるすべての人々のために全力を尽くされた。教会も自身の頭であるキリストの教えにしたがって、この世を否定せずキリストの光を広める必要がある。教会の諸福祉活動の目的はこの世をより良いものにするということである。したがって、「キリスト信者は、人間が才能と努力によって生み出す活動は神の権能に反抗するものであるとか、理性を持つ被造物は神のはかりがたい計画の結実であると確信すべきである。しかし、人間が力を増せば増すほ

7) Harvey Gallagher Cox, *The Secular City: Secularization & Urbanization in Theological Perspective* (Princeton & Oxford: Princeton University Press, 2013).

8) 「現代世界における教会に関する司牧憲章」, 40.

9) John Michael Perry, *Exploring the Identity & Mission of Jesus* (Kansas: Sheed & Ward, 1996), 254-257.

10) 「現代世界における教会に関する司牧憲章」, 33.

11) 同書, 40.

12) George Herring, *An Introduction to the History of Christianity: From the Early Church to the Enlightenment* (London: Continuum, 2006), xii-xiii.

ど、個人としてまた共同体としてその責任は大きくなる。このことから明らかなことは、キリスト教のメッセージは、世界の建設から人々の手を引かせ仲間の福祉をおろそかにするように誘うものではなく、むしろこれを実行するよう、いっそう強く義務付けるものであるということである」¹³⁾。

上に述べたように、カトリック教会は世俗そのものを悪と見なしてはいないが、神の存在を否定すること、宗教を邪悪と見なすこと、また道徳を軽視することといった近年の現象を問題にしている。教皇フランシスコが指摘するように、信仰は人類の真の発展のために欠かせないものである。もし信仰がなくなれば、人生の意義そのものがなくなってしまうからである。教皇フランシスコは『回勅 信仰の光』で次のように述べている。「信仰の炎が消えれば、他のすべての光も消えてしまう」と¹⁴⁾。

欧米では世俗化が進行している。世俗化に伴い、社会の中で宗教の居場所が完全になくなると予想していた学者たちもいた。しかし、事実はそれとは異なるものである。伝統的な宗教が弱体化する一方、霊性（スピリチュアリティ）を探し求める人は増えているからである¹⁵⁾。その主な理由は、合理主義と消費主義が人間の心に大きな穴をあけてしまったためである。人間が求める真の幸福は、どんなに優れた技術や物質でも満たされることがないのである。特に欧米の人々の多くはスピリチュアリティを探して東洋の霊性に惹かれるようになっている。しかし、時には霊性を探し求める人が新興宗教団体の餌食となってしまうことも少なくない。新興宗教団体は信者を自分たちのイデオロギーに従事するように洗脳することがあるからだ。その結果、1995年のオウム真理教によるサリン事件のような恐ろしい事件も起きてしまった¹⁶⁾。また、新興宗教団体は宗教を商売化という現象を生じている。彼らは信者たちにお金で幸福が買えるという嘘を信じ込ませるのである。教皇フランシスコは、『使徒的勧告 福音の喜び』の中で新興宗教団体は現代社会の世俗主義が生み出したものであると指摘している。教皇フランシスコは次のように新興宗教団体について語っている。

「多くの民族のカトリック信仰は、今日、新宗教の広がりという課題に直面しています。これら新宗教は、あるものは原理主義的な傾向を持ち、またあるものは神なしの霊性を提示しているように見えます。これは、一方で唯物主義的・消費主義的・個人主義的な社会に対する人間らしい反応であり、他方で隅に置かれ、貧しくされたところで生きる人々の欠乏を利用するものです。このような人々は、人間としての大きな苦しみの中で生き延び、自分たちの必要をすぐに満たしてくれるものを求めています。巧妙に浸透するという特徴を持つこれら新宗教は、個人主義的な雰囲気の中で、物質主義的な合理主義が残した空洞を埋めようとしています」¹⁷⁾。

13) 現代世界における教会に関する司牧憲章」, 34.

14) 教皇フランシスコ, 『回勅 信仰の光』, 4.

15) Philip Gorski and Ates Altinordu, "After Secularization?," *Annual Review of Sociology*, Vol. 34 (2008): 55-85.

16) Mark R. Mullins, "The Legal and Political Fallout of the 'Aum Affair'," in *Religion and Social Crisis in Japan: Understanding Japanese Society Through the Aum Affair*, eds. Robert J. Kisala and Mark R. Mullins (New York: Palgrave, 2001), 77-78.

17) 教皇フランシスコ, 『使徒的勧告福音の喜び』, 63.

世俗化の急速な進行の責任は、教会の指導者にもある¹⁸⁾。教皇フランシスコは、一部の教会の指導者の冷淡さが一般の信者を疎外してしまったと批判している。一部の信者は教会の指導者と共同体に受け入れられないという事態が起きている。特に、指導者の考えに適合しない信者は邪魔者と見なされる。また、一部の指導者たちが教会の管理業務に夢中になって司牧的な活動を怠っている。教会を徹底的に組織された会社のように扱い、利益のことばかり考えている。そうした指導者は思い悩んでいる人々に耳を傾けないで外見적인ことに囚われているのである。その結果、心に大きな悩みを抱える人々は教会から離れ去り、やすらぎを求めて怪しい新興宗教団体に入ってしまう。教皇フランシスコによると教会の指導者たちの過剰な官僚主義こそが宣教活動の妨げになっている。教皇フランシスコは次のようなことばで教会の内的な問題を指摘している。

「洗礼を受けているものの一部が教会への帰属を実感していないのは、小教区や共同体の中に人を受け入れない雰囲気や構造が存在することや、人間の生活に大なり小なり生じる問題に対する官僚的態度にあることも認めなければなりません。多くの点で、司牧より管理が重視されています。同様に、福音宣教への取り組みなしに秘跡が執行されているのです」¹⁹⁾。

世俗化の進行により、一部の人は宗教や信仰は単なる迷信に過ぎないとしている²⁰⁾。人間は心の不安を安定させるために宗教を作り上げているとしている。理性を使って神を知ることができないために、宗教の信憑性に疑いを抱いている。ドイツの哲学者イマヌエル・カントも、理性で神の存在を証明することはできないと主張した²¹⁾。確かに神についてのすべてを合理的に知り尽くすることはできないが全く何も理解できないという訳でもない。例えば、教皇ヨハネパウロ二世は『回勅 信仰と理性』において、宗教的な経験また理性のバランスが大事であるとしている。人類とは神から理性をいただいた賜物であり、それを正しく使って神のことをも探求すべきであると強調している。「信仰と理性は、人間の靈魂が真理の観想へと飛翔していく両翼のようなものです。ところで、人間精神に、真理を認識し、ついには神自身も認識する願望を与えたのは、ほかならぬ神ご自身です。それは、神を認識し、神を愛するものが、同じように自分について十分な真理に達することができるようにするためです」²²⁾。

現代社会は、科学と技術の発展を重要視している。まさに科学と技術の進歩こそが、人類の生活をより便利で快適にしている。また、医療の分野における進歩も、人間を助けている。科学がもたらした成果は大きいと思われるが、他方で科学は人間の心の領域に属するものには触れることはできない²³⁾。例えば、技術の発展は通信機器の機能を良くすることはできるが、その機器の悪用を防

18) Samuel Rodriguez, *The Lamb's Agenda: Why Jesus is Calling You to a Life of Righteousness & Justice* (Nashville: Thomas Nelson, 2013), 102-103.

19) 『使徒的勧告福音の喜び』, 63.

20) Michael Warner, Jonathan Van Antwerpen & Craig Calhoun, eds., *Varieties of Secularism in a Secular Age* (Cambridge: Harvard University Press, 2010), 1-31.

21) Immanuel Kant, *The Critique of Pure Reason*, trans. Norman Kemp Smith (New York: St. Martin's Press, 1965), 48.

22) 教皇ヨハネパウロ二世, 『回勅 信仰と理性』, 冒頭

23) Michael Horace Barnes, *In the Presence of Mystery: An Introduction to the Story of Human Religiousness* (Mystic: Twenty Third Publications, 2003), 86-88.

ぐことはできない。科学と技術は倫理と無関係であり、それ故善悪を区別することはできない²⁴⁾。だからこそ、人間は倫理の道を辿る必要がある。人間が道德の道から外れてすべてを相対的に考えるようになれば、罪に対する意識をも失う可能性がある。現代社会において、相対主義は人間の自由のために不可欠であるとされているが、現実には人間は真の自由を得どころか望ましくないことの虜になってしまっている。特に青少年は過剰な相対主義の悪影響を受けて、人生に意義を見出すことすらできなくなっている。教皇フランシスコは、現代社会の倫理低下と相対主義には深い関係があると指摘している。彼は、次のことばで世俗化が生み出した無神論者の文化を批判している。

「世俗化の歩みには、信仰や教会を個人の私的領域へと追いやってしまう傾向があります。さらに、超越的な存在をすべて拒否することにより、倫理観が低下し、個人の罪や社会の罪に対する感覚も弱まり、相対主義が着実に広まりました。そのため、特に変化に敏感な少年・青年の層が、方向性を見失うことが多くなりました」²⁵⁾。

現代社会はリアルタイムで情報交換ができるようになった。インターネット上には、ありとあらゆる分野についての情報があふれている。インターネットには、良い情報もそうでないものも無差別に普及させる力を持つ。インターネットに接続さえすれば、誰でも自由に様々な情報にアクセスすることができる。現代社会は利益を何よりも重視しているために福音的価値観や倫理的な価値観を軽視する傾向にある²⁶⁾。例えば、ゲームを販売する会社は、青少年の興味を引き出すために戦争や暴力をテーマにゲームを開発している。その結果、ゲームに夢中になった青少年が家族や他人に暴力を振るうようになる場合もある。そのためにも、教会は多くの人々に情報を正しく使えるよう教育すべきである。教会の指導者は新しい技術を遠ざけず、それを宣教活動に役立てる必要がある。教皇フランシスコは指導者たちがキリスト信者、特に青少年たちに対してインターネットや情報の正しい使い方について教育をする必要性があると次のことばで訴えている。

「わたしたちは情報社会の中で生活しています。この社会はわたしたちに、情報をすべて同じレベルのものとして、無差別にもたらしめます。そしてわたしたちに、倫理上の問題が生じた際、ひどく表面的な捉え方をさせることになるのです。したがって、批判的に考えることを教える教育、価値観の成熟へと導く教育が必要となります」²⁷⁾。

世俗主義の進行にもかかわらず、カトリック教会は福音に基づいた価値観を伝え、それを心得るよう多くの人々に促している。カトリック教会は、様々な活動を通して世界中でキリストのメッセージを伝えている。特に人間の尊厳の為、弱い立場にいる人々と社会的平等のために活動を展開している。世の権力者はしばしばカトリック教会の活動に脅威を覚え、この活動を弾圧することもある。

24) Dimitris Chorafas, *Science & Technology* (Cham: Springer, 2015), 41-43.

25) 『使徒的勧告福音の喜び』, 64.

26) Bobby Mills, *Let the Church Be the Church: Facing the Lack of Moral Leadership Accountability in Christianity* (New York: Morgan James Publishing, 2014), 98-110.

27) 『使徒的勧告福音の喜び』, 64.

このような厳しい状況の下でも教会は何者をも恐れず、聖霊の力によって人間の尊厳、善、平和と平等のために福祉活動を絶えず続けていく必要がある²⁸⁾。教皇フランシスコもまた、教会は世論に左右されることなく自らの使命を全うすべきであると教えている。

「世俗主義の風潮が社会に蔓延しているにもかかわらず、多くの国でキリスト者が少数派であるところでもカトリック教会は、信頼できる制度として一般世論から評価されており、最も困窮している人々に対する連帯と配慮に関して信頼されています。平和、一致、環境、生命の保護、人権や市民権などの問題を解決するために、教会はたびたび仲介者の役割を果たしました。全世界で、カトリック学校や大学がどれほど貢献していることでしょうか。これは非常に肯定的なことです。しかし、世論にとってそれほど受け入れやすいほかに問題をわたしたちが提示する時、人間の尊厳と共通善に対する同じ確信からそれを行っているということを示すには、かなりの努力を必要とします」²⁹⁾。

家族は、人間社会の基本単位である。しかし、世俗化の進行により、家族に対する敬意が破壊され³⁰⁾、片親、同性愛の親権、中絶などが欧米では一般的になっている。その結果、家族と婚姻制度が打撃を受けている。また、伝統的な信者の家族でさえ、ともに祈ること、ともに食事をすることが減っている。親たちが多忙すぎて、週に一度でさえ自分たちの子供を教会に連れて行くことができないのである。子供のころに教会共同体と接する機会が少なければ、大人になってからは教会共同体と完全に縁を切ることになるかもしれない。それを防ぐためにも、カトリック信者の家庭は、子供たちに対して信仰教育を育成する場となる必要がある。つまり、親たちは子供に信者として良い模範になる必要があるのである。子供たちは健全な家庭に育つことで、教会共同体に親しさを感じ、信仰も強くなっていく可能性がある³¹⁾。教皇フランシスコは次のことばによって信者の家庭が宣教活動の担い手として重要な役割を持つと指摘している。

「家庭は、他の共同体や社会的きずなと同様、文化上の深刻な危機に直面しています。家庭の場合は、きずなのもろさが特に深刻です。家庭は、社会の基本的な細胞であり、違いのある一人一人がともに住むことと、帰属意識を学ぶ場であり、親から子へと信仰が伝えられる場です。結婚をどのような形式であっても成立し、各人の感じ次第で変更できる、単なる感情的な満足のかたちには過ぎないかのように捉える傾向があります。しかし、結婚は社会に対し不可欠な貢献をなし、当事者二人の、感情のレベルや一時的な必要性を超えるものです」³²⁾。

28) Kenneth Himes, "Vatican II & Contemporary Politics," in *The Catholic Church & the Nation-State: Comparative Perspectives*, eds. Paul Christopher Manuel, Lawrence Readon & Clyde Wilcox (Washington D.C.: Georgetown University Press, 2006), 15–32.

29) 『使徒的勧告福音の喜び』, 65.

30) Rodney Clap, *Families at the Cross Roads: Beyond Traditional & Modern Options* (Downers Grove: InterVarsity Press, 1993), 149–154.

31) Lawrence Richards, *Christian Education: Seeking to Be Like Jesus* (Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1975), 214–216.

32) 『使徒的勧告福音の喜び』, 66.

現代社会は、宗教的な活動を軽蔑している。それ故、キリスト信者たちは挫折してしまう可能性がある。とりわけ、学校または職場で福音的価値観に基づいた人生を送るのは大変困難なことである³³⁾。しばしば周りの人々によそよそしい態度が見られることもある。そのような状況の下で信者たちは信仰に対して疑問を持つことになるかもしれない。また、世の価値観に合わせるために不正を働いたり、道徳に反することをしたりすることもあるかもしれない。宣教師たちでさえも、世論に動揺されて自身のアイデンティティや信仰を疑うことになるかもしれない。教皇フランシスコは、世俗化がもたらした危機について以下のように語っている。

「メディア文化と一部の知識人によって、しばしば教会の教えに対する、著しい不信と何らかの幻滅が伝えられています。その結果、司牧活動に携わる人の多くが、祈っているにもかかわらず、ある種の劣等感を感じ、自分のキリスト者としてのアイデンティティや信念を、相対化したりするようになります。こうして悪循環が生じます。彼らは自分自身にも、自分がしていることにも喜びを覚えることがありません。福音宣教が自らのアイデンティティであるとは感じられず、その仕事への献身も弱まります。彼らの宣教の喜びは消え失せ、他の人と同じであることや、他の人が所有するものを持つことにこだわるようになってしまうのです。こうして、福音宣教の任務は強制されたものとなり、ほとんど努力することもなく、それに時間を割くこともなくなります」³⁴⁾。

上述したように、現代社会で進む世俗化により、キリスト信者が自身の信仰を守るのはますますが困難なことになっている。それでも、キリスト信者は希望を持って信仰生活を大事にする必要があるのである。

4. おわりに

世俗化が進行しているのは、確かなことである。それを否定することはできない。世俗主義は神の存在、信仰と宗教の居場所を失わせている。結果として、人間社会における様々な伝統的制度は破壊されつつある。教皇フランシスコは、このような時にこそ、信者たちは福音的価値観を大事にしながら信仰を日常の生活に生かす必要があると強調する。物質主義と消費主義は人間の心にポツカリと穴をあけている。ものまたは快楽が人間の内的なニーズを満たすのは容易なことではない。だからこそ、信仰が不可欠なのである。神への信仰のみが人間に真の幸福を与えることができ、また、健全な人間社会を築くことができるはずである。

33) Victor Ezigbo, *Introducing Christian Theologies: Voices from Global Christian Communities*, vol. 2 (Eugene: Cascade Books, 2015), 308-326.

34) 『使徒的勧告福音の喜び』, 79.